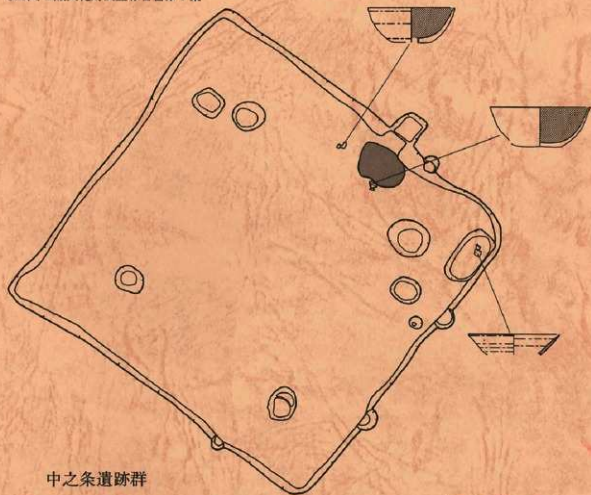


坂城町埋蔵文化財調査報告書第7集



中之条遺跡群

上町遺跡 III

長野県埴科郡坂城町住宅団地造成事業発掘調査報告書

NAKANOJYO SITES UWAMACHI SITE

1996

坂城町土地開発公社

坂城町教育委員会

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

中之条遺跡群

上町遺跡 II

長野県埴科郡坂城町上町地区埋蔵文化財発掘調査報告書

NAKANOJYO SITES UWAMACHI SITE

1996

坂城町土地開発公社

坂城町教育委員会

序

町住宅団地造成事業に伴う中之条遺跡群上町遺跡Ⅱの埋蔵文化財発掘調査は、平成6年度に実施されました。

調査の結果、遺構は竪穴住居址2棟(奈良・平安時代)、掘立柱建物址1棟(中世?)等が発掘されました。また遺物としては、縄文土器、土師器、須恵器等が出土しました。

これらの調査結果から、他の中之条遺跡群の発掘調査結果を総合的に考察することで、この地域の当時の生活を知る貴重な資料を得ることができました。

発掘の途上、近隣の方々には、大変なご協力をいただきまして、心からお礼申し上げます。

本調査にあたり森嶋稔先生には、終始温かいご指導をいただき感謝と敬意の他ありません。

さらに長野県教育委員会ははじめ快く作業に協力してくださった皆様方に、感謝を申し上げ序にかえる次第であります。

坂城町教育委員会
教育長 西沢民雄





1 本書は長野県坂城町住宅団地造成に伴う上町遺跡IIの発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、坂城町土地開発公社から委託を受けた坂城町教育委員会が実施した。

- 3 調査期間 平成6年11月16日～12月22日
整理期間 平成8年2月1日～3月7日
- 4 本報告書の執筆・編集は小平が行った。
- 5 本遺跡の調査における出土遺物、実測図等は坂城町教育委員会が保管している。
- 6 本報告書作成にあたって下記の方々、機関からご助言・ご指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。(50音順・敬称略)

尾見智志 川上 元 小平和夫 早川泰弘 百瀬新治
山岡邦康 和坂時 剛
納見塚広城シルバー人材センター
長野県教育委員会文化課



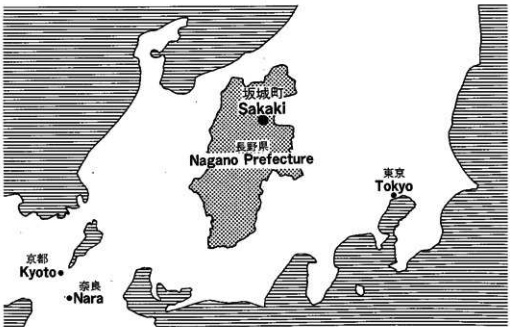
1 遺構名は時代別でなく、通し番号である。遺構の略称は以下の通りである。

- H→整穴住居址
F→獨立棟建物址 D→土坑址
P→ピット S→石

- 2 挿図の縮尺は以下の通りである。
整穴住居址・獨立棟建物址・土坑址→1:80
住居址カマド→1:40 土器→1:2 1:4
石器→1:1

- 3 挿図のスクリーン・トーンは以下を示す。
- | | | |
|----|--------|---------------|
| 遺構 | 遺構構築土 | 焼土 |
| 遺物 | 縄文土器断面 | 土師器黒色処理・須臾器断面 |

- 4 土層の色調は『新版 標準土色帖』の標記に基づいて示した。
- 5 遺跡図種の針測には、プランニクスセブンを用い、3回の針測の平均値を面積として示した。



第1図 長野県位置図

中之条遺跡群 上町遺跡 II CONTENTS

序

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯—— 1

第2節 調査の方法—— 2

第II章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境—— 4

第2節 歴史的環境—— 5

第III章 上町遺跡

第1節 調査概要—— 8

1 遺跡の立地と概要—— 8

2 基本層序—— 9

3 調査日誌—— 9

第2節 遺構と遺物—— 10

1 竪穴住居址—— 10

1) H1号住居址—— 10

2) H2号住居址—— 10

2 掘立柱建物址—— 12

1) F1号掘立柱建物址—— 12

3 土坑址—— 13

1) D1号土坑址—— 13

2) D2号土坑址—— 13

3) D3号土坑址—— 14

4) D4号土坑址—— 14

5) D5号土坑址—— 14

6) D6号土坑址—— 14

7) D7号土坑址—— 14

8) D8号土坑址—— 14

9) D9号土坑址—— 15

4 遺構外出土遺物—— 15

第3節 写真図版—— 18

第IV章 成果と課題

第1節 縄文時代—— 21

第2節 古代—— 21

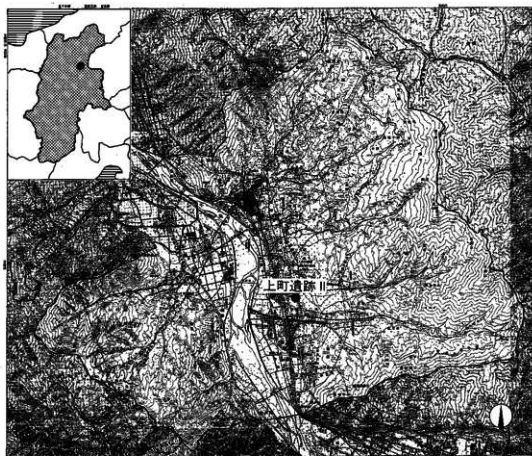
調査体制



第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

長野県埴科郡坂城町は、昭和30年埴科郡坂城町・中之条村・南条村が行政合併して発足した。その後昭和35年に更級郡村上村が編入合併し現在に到る。地理的には長野市を中心とした北信地方と上田市を中心とした東信地方との接点にあたり、北側を更級市・埴科郡戸倉町・更級郡上山田町、東側を小県郡真田町、西側、南側を上田市とそれぞれ接している（第2図）。面積は53.64㎢で約1万6,900人の人口がある。町内の350を超える事業所の製造品出荷額等は1,400億円を超え、県内町村のトップであり、国内でも特異な田園工業都市である。



第2図 長野県埴科郡坂城町位置図



第3図 上町遺跡II位置図(1:10,000)

今回、大字中之条^{うすまち}上町において坂城町土地開発公社による住宅団地造成事業が計画され、周知の遺跡内であることから、長野県教育委員会文化課・坂城町土地開発公社・地元研究者森嶋稔氏・坂城町教育委員会の4者による保護協議の結果、遺跡範囲を確認するため平成6年11月16日～22日試掘調査を実施した。

5本の試掘トレンチを入れ遺構の有無を確認したところ、竪穴住居址・掘立柱建物址等の遺構、縄文土器・土師器・須恵器等の遺物が検出された。

そこで再度の保護協議の結果、遺構の確認された1,116㎡の範囲について記録保存を実施することとなった。

発掘調査は、坂城町土地開発公社より委託をうけた坂城町教育委員会が主体となり調査を実施した。



上町遺跡II調査前(西より撮影)

引用・参考文献 坂城町『坂城町40周年町勢要覧1995』平成7年

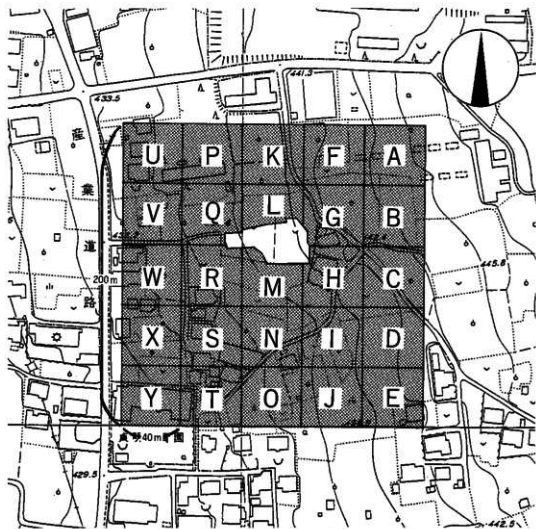
第2節 調査の方法

遺構の検出にあたっては、重機によって表土を除去した後、人力によって遺構確認面の精査及び遺構の掘り下げを行い、簡易遣り方実測で図化し、遺構・遺物の測量、写真撮影、遺物の取り上げを行った。

遺構・遺物の測量には正確な位置が記録でき、調査区北側に隣接する上町遺跡(平成6年調査)と

整合できるVIII系国家座標軸を基にグリッドを組んだ(第4図)。グリッド設定にあたっては調査対象地区を東西200m、南北200mの正方形区画したものを大グリッドと設定し、その中を40m×40mの中グリッドで25分割し、北東隅より北から南にA・B・C～Y区とアルファベットの大文字で記号化した。さらにその中を4m×4mのグリッドで100分割し、東西列を東より五十音順であ・い・う～こ、南北列を北より算用数字で1・2・3～10とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとし、遺構検出位置・遺構外出土遺物の取り上げはすべてこれに拠った。

引用・参考文献 佐久市教育委員会・佐久歴史文化財センター『金井城跡』平成2年



第4図 上町遺跡II調査区設定図(1:2,500)

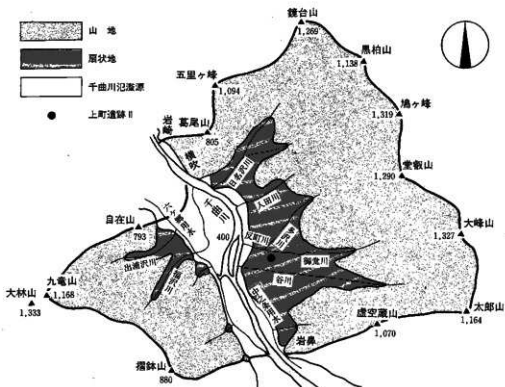
第二章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

更埴地方最南部に位置する坂城町は、町の中央を北流する千曲川^{ちくまがわ}によって、坂城広谷と呼ばれる貫通谷を形成している(第5図)。

千曲川左岸は、出浦沢川・福沢川等に形成された小複合扇状地と千曲川の断層崖であり、断層崖は急崖で泥岩・珉岩の崩落があり、現在も交通の障害となっている。

逆に右岸は、北側の横吹・南側の岩鼻の断崖、西側の千曲川河床によって制約され、他の地域との交通の障害となるが、日名沢川、入田川・御堂川・谷川等によって形成された複合扇状地は、更埴地方南部で最も開かれた洪積台地をなしている。扇状地の扇端部は段丘崖となり、千曲川沿いの沖積地に到り、微高地上を太平洋側と日本海側を結ぶ国道18号線・JR信越本線が通じている。



第5図 坂城町地形概念図

気候は年間通じて降水量が少なく晴天の日が多い内陸性気候で、過去10年間の平均降水量はおよそ800mm。日本で最も雨量の少ない地域の一つである。年間通じての温度変化は大きい、年間平均気温12.9℃と大気の乾燥とともに暮らしやすい気候である。

今回発掘調査を実施した上町遺跡IIは、千曲川右岸の中之条地区に位置し、御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇尖部にあたる。付近はリンゴやブドウ畑が広がっていたが、最近宅地化が進んでいる地域である。

引用・参考文献 坂城町誌刊行会『坂城町誌 上巻』昭和54年
滝沢公男『更埴市南部の地理的環境と交通』『更埴の自然と歴史』平成3年

第2節 歴史的環境

現在のところ、坂城町において最も古い資料は保地遺跡で、旧石器時代後期の上ヶ屋形彫刻器・小形の尖頭器が数点採取されている。

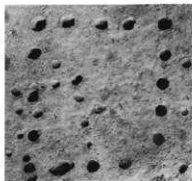
縄文時代一本格的な調査が実施されたのは数例に過ぎず、採集遺物が多い。金井遺跡群で早期と思われる特殊磨石が出土している。込山A・B遺跡で前期、中期の土器や住居址が確認され、金井遺跡でも中期の勝坂式土器や出尻土偶が採集されている。晩期では保地遺跡(昭和42年調査)で亀ヶ岡系の土器群が出土し、込山E遺跡からは遮光器土偶の頭部が採集されている。

千曲川の沖積地においては東裏遺跡II・青木下遺跡(平成4・5年調査)で中期～晩期にかけての土器・石器が出土し、塚田遺跡II(平成5年調査)でも前期～晩期の土器が出土していることから、付近に集落址が存在する可能性が考えられる。

弥生時代—千曲川沖積地の中州と思われる塚田遺跡(平成4年調査)や塚田遺跡IIで後期の集落遺跡が検出された。塚田遺跡IIでは後期後半の箱清水期の集落が複数期にわたっていることが判明している。

古 代—中之条遺跡群の寺浦遺跡(No.2—1平成6・7年調査)・寺浦遺跡II(平成7年調査)・上町遺跡(No.2—2平成7年調査)・北浦遺跡(No.2—3)・宮上遺跡II(No.2—5平成5年調査)で古墳時代後期～平安時代前期の集落が展開していることが判明した。寺浦遺跡では大型の掘立柱建物址が検出され、郷家が存在する可能性が考えられる。

東裏遺跡IIでは古墳時代中期末に位置づけられる玉造り工房址3棟検出した。東裏遺跡では中期末に位置づけられる手捏土器や滑石製の刺形模造品・勾玉等が出土していることから、祭祀遺構の存在が予想される。



寺浦遺跡F14・15号掘立柱建物址

古墳では、千曲川右岸の中之条の御堂川、南条の谷川の河川沿いに後期古墳群が集中し、**御堂川古墳群**(No11・14)・**谷川古墳群**(No16)等が形成されている。左岸では出瀨川・福沢川の支流に後期古墳群が集中し、千曲川水系最大級の石室をもつ**御厨**古墳がある。

9世紀初頭になると坂城郷では込山廃寺が建立され、瓦の生産が土井の入窯跡の瓦窯で生産されたことが判明している。この窯址では上田市の信濃国分寺・尼寺、更埴市の正法廃寺の差し瓦が生産されている。他に坂城には須恵器の窯址では**丸組窯址**(No17)、垣戸窯址、**雷平**窯址等がある。

11世紀末には北日名経塚が築かれ、**銅製製経筒**・和鏡・白磁輪花小皿等が出土し、国立東京博物館に所管されている。保元2年(1157)の銘のある経筒



北日名経塚銅製製経筒

には定西の名が見え、三重県朝熊山経塚・大阪府金剛山経塚の経筒銘にもその名がみえることから、同一人物説が指摘されている。

中世・近世**開敏製鉄遺跡**(No19昭和52・53年調査)で、室町時代後期と肯定できる製鉄炉2基検出された。千曲川の砂鉄を原料にしていたこと、地元産の褐鉄鉱を使用していた可能性が考えられることが判明している。城跡では**観音坂城跡**(No18)があり、土塁の一部が現存する。天正12年(1584)上田城主真田昌幸との攻防戦のため、上杉景勝の将村上景国が拠ったと伝えられるが定かではない。経塚では**社倉神経塚**(No20)で白銅鏡や永楽通宝、金の小粒多数等が発見されている。

江戸時代になると、坂木・中之条村等14ヶ村が幕府の天領となり、坂木村に坂木代官所が設置されたが、後に中之条村の**中之条代官所**(No21)に移転した。坂木は北国街道の宿駅として発展し、明治に至って坂城に改正し、今日に至る。

引用・参考文献 坂城町誌発行会『坂城町誌 中巻』昭和56年
 坂城町地方自治会『坂城町地方誌 第2巻』昭和53年
 宮下健司『経塚と伴土器』『信濃文化研究所紀要』上巻 平成7年



第6図 上町遺跡11周辺遺跡分布図(1:12,500)

第三章 上町遺跡

第1節 調査概要

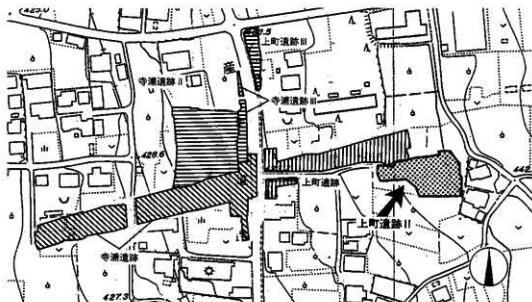
1 遺跡の立地と概要

中之条遺跡群上町遺跡IIは標高439m内外を測る。御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇尖部にあたる。江戸時代後期に作成された「中之条村御林絵図」(格致学校歴史民俗資料館所蔵)を見ると当遺跡一帯は畑となっているが、現在宅地化が進んでいる。

平成元年に作成された「坂城町遺跡分布図」によると弥生～平安時代の集落遺跡に位置づけられ、当遺跡北側で隣接する上町遺跡(平成6年調査)・上町遺跡III(平成7年調査)で古墳後期～平安時代前期の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出された。西側は道路を挟んで寺浦遺跡(平成5～7年調査)・寺浦遺跡II(平成6年調査)・寺浦遺跡III(平成6年調査)となり、古墳時代後期～平安時代前期の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出されたことから、遺跡名で分けられてはいるが同一の集落址が展開していると考えられる。本遺跡付近が集落の上限にあたると考えられ、上町の地名もこれに由来するものかも知れない。

調査区の調査面積及び検出された遺構の概要は以下のとおりである。

調査面積 1,116㎡。



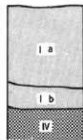
第7図 上町遺跡II周辺図(1:2,500)

遺構 竪穴住居址-2棟(奈良・平安2)・掘立柱建物址-1棟(中世?)・土坑-9基・ピット-36基
 遺物 縄文土器 土師器 須恵器 石器

2 基本層序

上町遺跡IIの基本層序は第8図に示したとおりである。

- I a 層 黄褐色土 (10Y R5/6) 盛土
- I b 層 黒褐色土 (7.5Y R3/2) 攪乱層
- I c 層 褐色土 (10Y R4/6) 耕作土
- II 層 暗褐色土 (10Y R3/4)
 直径5mm~1cm位の礫を含む
- III 層 黄褐色土 (10Y R5/8)
 透機検出面
- IV 層 褐色土 (7.5Y R4/3)
 縄文包含層



第8図 基本層序模式図(1:20)

3 調査日誌

- 平成6年11月16日(水) 重機による表土除去。
 18日(金) 表土除去終了。プレハブ設置。
 28日(月) 開始式を行う。調査開始。H1号住居址調査。
 30日(水) H2号住居址掘り下げ始める。
 12月1日(木) F1号掘立柱建物調査。
 H2号住居址カマドを掘り下げる。
 12日(月) H2号住居址掘り方調査。縄文包含層掘り下げ遺構確認されず。土坑・ピット調査。
 20日(火) 遺構調査終了。
 22日(木) 発掘調査完了。
 平成8年2月~3月 整理作業。



表土除去作業



住居址検出作業

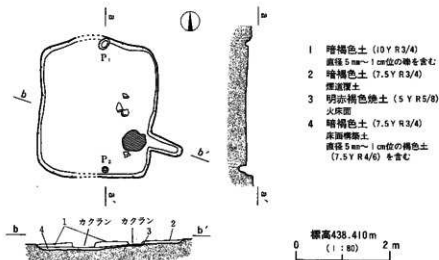
第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居址

1) H1号住居址(第9図)

検出位置—Lく8、く9グリッド。

南北壁中央部を攪乱によって破壊されている。長軸2.40m、短軸2.34mの隅丸方形を呈する。北壁長は2.2m、東壁長は2.5m、南壁長は2.8m、西壁長は2.46mで、南北主軸はN-103°-Eを指す。壁残高は3~15cmを測る。床は平坦だがカマド周辺部以外軟弱である。ピットは南北壁中央部付近から2基検出された。カマドは東壁の中央部に位置し、煙道部が長く張り出す。遺存状態は悪く、火床面のみの検出で付近には構築石材が散在していた。遺物は土師器長胴甕・須恵器環が、カマド付近の床面から検出したが、小片で図示できるものはない。時期は須恵器が底部へラ切りであることから奈良時代に位置づけたい。



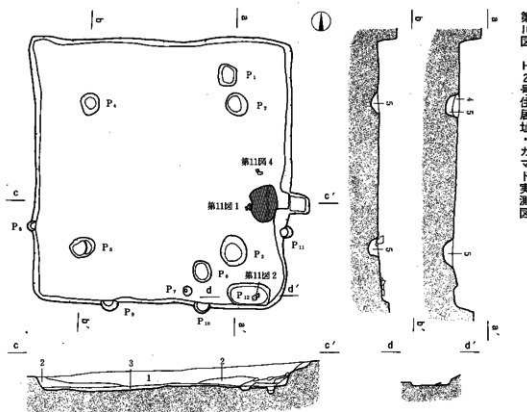
第9図 H1号住居址実測図

2) H2号住居址(第10図)

検出位置—Lう8、う9、え8、え9グリッド。

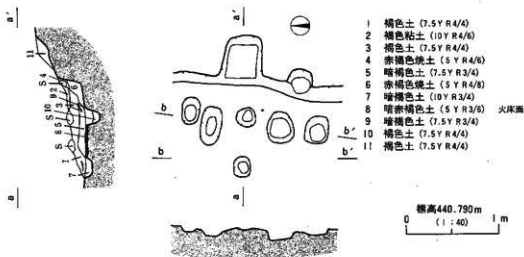
D7号土坑址を切り構築。1・2号ピットに一部壁を切られる。長軸5.36m、短軸5.24mの隅丸長方形を呈する。北壁長は5.32m、東壁長は5.12m、南壁長は5.8m、西壁長は5.32mで、南北主軸はN-97°-Eを指す。壁残高は20~28cmを測る。床は平坦で全面貼床で堅固である。ピットは8基検出された。このうちP2~5が主柱穴で深さはP1が13~23cm、P2が15~22cm、P3

第10図 H2号住居址・カマド実測図



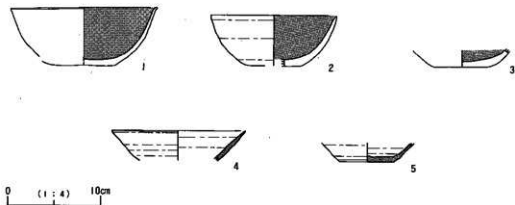
- 1 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径5mm~30cm位の礫を多量に含む
- 2 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径10cm~30cm位の礫を多量に含む
- 3 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径5mm~5cm位の黄褐色土 (10Y R5/4) を含む 床面積礫土
- 4 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径5mm~1cm位の礫を少量含む
- 5 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径5mm~1cm位の礫を含む

標高440.790m
0 (1:80) 2m



- 1 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 2 褐色粘土 (10Y R4/6)
- 3 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 4 赤褐色焼土 (5Y R4/8)
- 5 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
- 6 赤褐色焼土 (5Y R4/8)
- 7 暗褐色土 (10Y R3/4)
- 8 暗赤褐色土 (5Y R3/6) 火床面
- 9 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
- 10 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 11 褐色土 (7.5Y R4/4)

標高440.790m
0 (1:40) 1m



第11図 H2号住居址出土遺物実測図

が8～13cm、P4が13～17cmを測る。P8～11は垂木の可能性が考えられる。P12は貯蔵穴と思われる。廃絶時にカマドの袖石、支石、土師器を破棄したらしい。カマドは東壁中央部よりやや南側に位置し、煙道部が張り出す。遺存状態が悪く、火床面のみの検出であった。付近には構築石材が散在し、掘り方で袖石跡も検出されたことから、粘土と自然石によって構築されていたと思われる。遺物は土師器・黒色土器・須恵器が出土したが、床面からの出土はカマド周辺部のみで、覆土中からは、小片で摩耗をうけた土器がほとんどである。住居廃絶時に自然石を投棄しているらしく、中央部付近に集中していた。用途は不明である。図示できた土器は5点のみで、黒色土器坏(第11図1～3)はロクロ調整されているものの摩滅し、切り離しは不明である。須恵器坏(第11図4・5)も出土している。第11図5も黒色土器と同様に切り離しの技法は不明である。

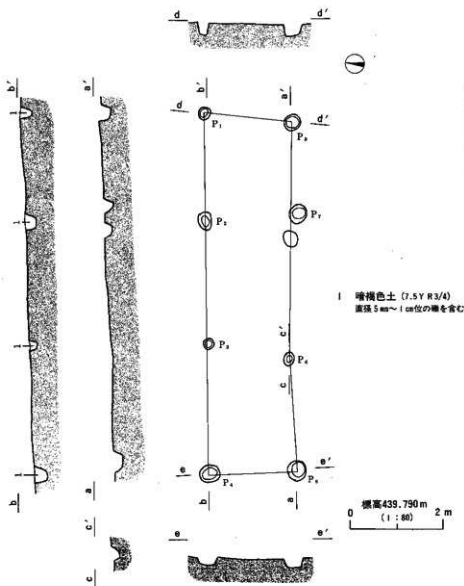
時期は出土遺物から奈良時代末～平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)に位置づけられる。

2 掘立柱建物址

1) F1号掘立柱建物址(第12図)

検出位置—Hこ2、こ3、Mあ2、あ3グリッド。

建物主軸はN-20°-Wを指す。長辺3.74m、短辺90cmで、3間×1間の側柱の建物である。各柱穴は平均37×38cmの円形を呈し、深さは51～63cmを測る。遺物はP5から黒曜石製の石鏃(第18図1)が出土したが、流れ込みと考えられる。時期は不明であるが、中世に位置づけたい。



3 土坑址

1) D1号土坑址(第13図)

検出位置-Gこ8グリッド。

長軸1.38m、短軸1.06mの円形。深さ15cm。

2) D2号土坑址(第13図)

検出位置-Lく9グリッド。

長軸1m、短軸72cmの楕円形。深さ35cm。



3) D3号土坑址(第14図)

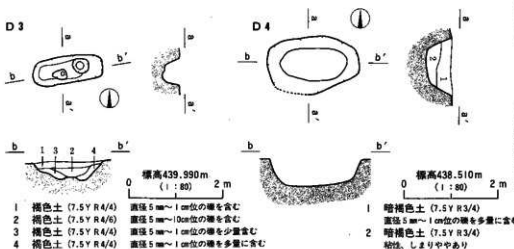
検出位置-Mえ1グリッド。

長軸1.5m、短軸60cmの長方形。深さ36cm。

4) D4号土坑址(第14図)

検出位置-Lき10グリッド。

長軸1.96m、短軸1.24mの楕円形。深さ59.5cm。



5) D5号土坑址(第15図)

検出位置-Mあ3、い3グリッド。

南側が調査区外になるため、全容は把握できなかったが、長軸は1.12mで楕円形を呈すると思われる。深さ34.5cm。

6) D6号土坑址(第15図)

検出位置-Mう1グリッド。

北側上層を30号ビットに切られる。長軸1.20m、短軸92cmの楕円形。深さ22.5cm。

7) D7号土坑址(第15図)

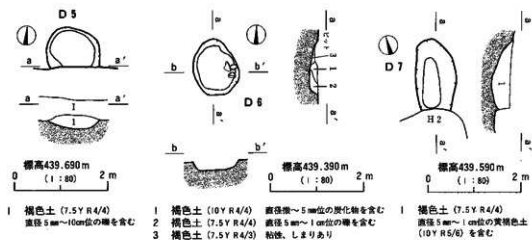
検出位置-Lお10グリッド。

長軸2.68m、短軸1.64mの楕円形。深さ70cm。

8) D8号土坑址(第16図)

検出位置-Lえ7、え8、お8グリッド。

長軸2.32m、短軸1.68mの不整楕円形。深さ32cm。



第15図 D5・6・7号土坑址実測図

9) D9号土坑址(第16図)

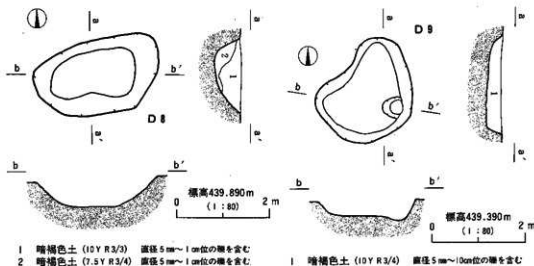
検出位置—Lい9、う9グリッド。

西側を短軸84cmの楕円形。深さ48.5cm。

D2・6・9号土坑址は住居・ピットとの切り合

い関係から奈良時代以前の構築であるが用途は

不明である。他の土坑も時期は判然としない。

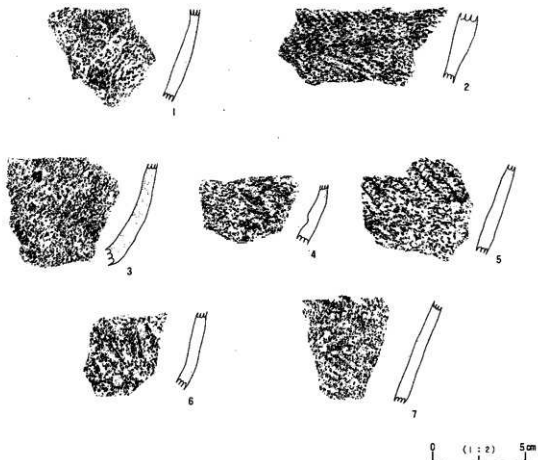


第16図 D8・9号土坑址実測図

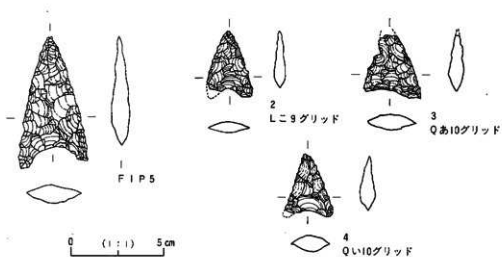
4 遺構外出土遺物

1) 縄文土器 (第17図)

Lけ10、こ9、こ10グリッドに集中して出土したが、遺構は検出されたため、遺構外出土遺物として扱う。胎土は黒曜石・白色鉱物を含む。1・2は、繊維を含む。5には縄文が施される。



第17図 遺構外出土遺物実測図

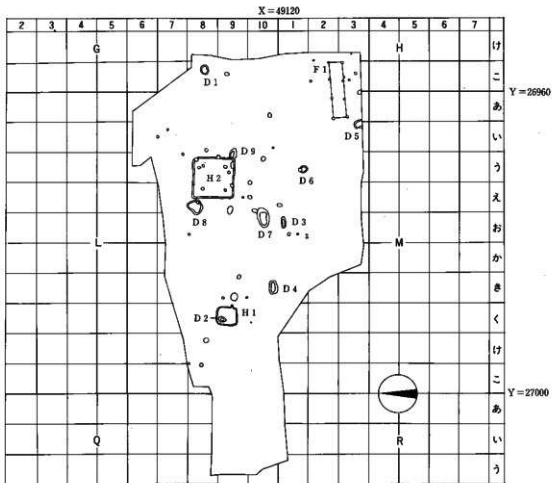


第18図 遺構外出土石器実測図

時期は縄文時代前期に位置づけたい。

2) 石 器 (第18図)

1はF1号掘立柱建物址P5から覆土から出土、2～4はグリッド遺物として取り上げた黒曜石製で、凹基無茎鎌の石鎌である。2～4は縄文土器出土範囲周辺部からの出土である。遺構が展開するのは調査区外にあたる南側ではないかと推測される。



第19図 上町遺跡II遺構配置図 (1:500)

第3節 写真図版



調査区全景 (北東より撮影)



H1号住居址 (西より撮影)



H2号住居址 (西より撮影)



H2号住居址カマド (西より撮影)



H2号住居址カマド掘り方 (西より撮影)



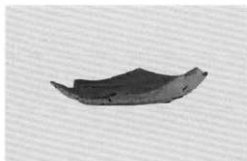
H 2号住居址第11図1



H 2号住居址第11図2



H 2号住居址第11図3



H 2号住居址第11図5



F 1号掘立柱建物址 (西より撮影)



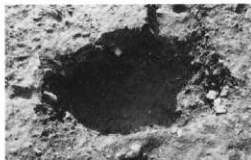
F 1号掘立柱建物址第18図1



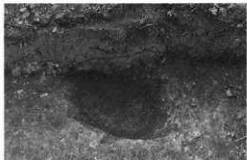
遺構外出土遺物



D 1号土坑址 (北より撮影)



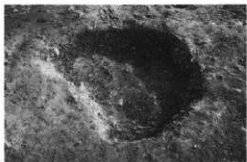
D 4号土坑址 (北より撮影)



D 5号土坑址 (北より撮影)



D 8号土坑址 (北より撮影)



D 9号土坑址 (北より撮影)



遺構外出土遺物
眼簾

第IV章 成果と課題

第1節 縄文時代

遺構は今回検出されなかったが、かなり限定した範囲で土器が出土している。グリッド範囲でLけ10、こ9、こ10に集中し、縄文包含層IV層もこの範囲でしか見当たらず、調査区外の両側に堆積していることから自然地形の落ち込みに堆積したと考えられる。土器も小片で非常に多い。隣接する上町遺跡で前期のD21号土坑址が検出されていることから、周辺に集落址が展開するのか今後の調査の課題である。

第2節 古 代

竪穴住居2棟のみの検出であったが、保存状態は2棟共悪い。H2号住居址覆土内には拳大～人頭大の自然礫が多量に出土している。これはH2号住居址のみで見られる傾向でなく、上町遺跡III H2号住居址、寺浦遺跡II H2号住居址、中之条遺跡群H1号住居址等でも見られる。また貯蔵穴にもカマドの袖石や支脚石を破棄している。自然礫も半壊した石と完形の石に区別することができる。時期は古墳時代後期～奈良時代が主体のようである。住居廃絶の過程でなんらかの信仰にもとづくものなのか判然としないが、今後の課題としたい。

引用・参考文献 助川順広『中之条遺跡群寺浦遺跡II』平成8年
小平光一『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』平成8年



H2号住居址礫出土状況（西より撮影）

上町遺跡Ⅱ発掘調査体制

【事務局】

教 育 長 西沢 民雄
社会教育課長 塩野入 猛
文化財係長 山崎 政弘(平成7年3月31日満任)
小宮山久春(平成7年4月1日着任)
文化財係 助川 朋広
小平 光一
青木 卓(嘱託職員)
瀬在 孝子(臨時職員)



【発掘調査】

調査指導者 森嶋 穂(日本考古学協会員・長野県考古学会会長・千曲川水系古代文化研究所所長)

調査担当者 小平 光一(坂城町教育委員会学芸員)

協 力 者 天田 澄子 塩野入早苗 春原かずい
高木 和子(以上、臨時職員)
青木 清 池田てる子 石井 和美
臼井 かね 栗林 初恵 小林さよ子
鳥谷 久 諏訪 孝雄 田中 勤
中島 金子 中村 静江 中村 容民
三井 重子 宮入 梅子 矢島岩太郎
柳沢 勲夫 山崎 貞子 山辺ケサエ
山辺 春男(以上、更埴地域シルバー人材センター)

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書

	【開畝製鉄遺跡—第1次調査報告書】	1977
	【開畝製鉄遺跡—第2次調査報告書】	1978
	【東裏遺跡】	1984
	【中之条遺跡群 宮上遺跡II】(概報)	1993
	【南条遺跡群 塚田遺跡】	1993
第1集	【南条遺跡群 東裏遺跡II・青木下遺跡】	1994
第2集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1994
第3集	【町内遺跡発掘調査報告書】	1995
第4集	【南条遺跡群 塚田遺跡II】	1995
第5集	【豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡】	1996
第6集	【中之条遺跡群 寺浦遺跡II】	1996
第7集	【中之条遺跡群 上町遺跡II】	1996

発行日 1996年3月29日

編集者 坂城町教育委員会

発行者 坂城町教育委員会

〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 ☎0268-82-2069

印刷者 鬼灯書籍株式会社

〒381 長野県長野市柳原2133-5 ☎026-244-0235

印刷仕様◇版型 B5版◇頁数 28頁◇版組 電子組版◇製版 モノクロ写真150線

◇用紙 表紙レザック180kg 本文コート紙90kg◇製本 糸かがり

報告書抄録

ふりがな	なかのじょういせきぐん うわまちいせき							
書名	中之条遺跡群 上町遺跡Ⅱ							
副書名	長野県埴科郡坂城町住宅団地造成事業発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	小平 光一							
編集機関	坂城町教育委員会							
所在地	〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地 TEL (0268) 82-2069							
発行年月日	1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うわまちいせき 上町遺跡Ⅱ	ながのけんはらにほのこぐん 長野県埴科郡 坂城町大字中 のじょう 之条	1521		36度 26分 30秒	138度 11分 35秒	1994年 11月16日～ 12月22日	1,116	住宅団地造成 に伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上町Ⅱ	集落址	縄文(前期) 奈良 平安	竪穴住居址 2棟 (奈良・平安) 掘立柱建物址1棟 (中世?) 土坑 9基	縄文土器(前期) 石畿 土師器 須恵器				